第　７７号

平成２２年１２月１日発行

寿楽院寺報

〒369-1245 深谷市荒川９８３
高野山真言宗　荒澤山 寿 楽 院
住 職　髙 橋 敬 行
電話　048-584-0302

参拝のご報告

平成二十二年十一月二日～三日の両日 石川県の名刹、高野山真言宗那谷寺（なたでら）へ参拝いたしました。

那谷寺は白山信仰の寺で、養老元年　（七一七）　越（こし）の大徳泰澄神融禅師によって開創されました。

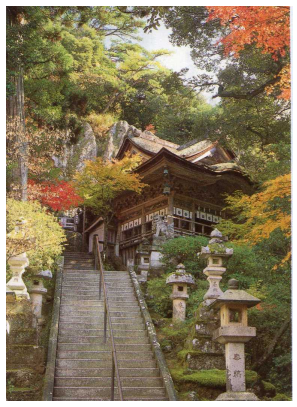
禅師は夢にみられた十一面千手観世音菩薩のお姿を自らお造りになり、洞窟内に安置し、岩屋の胎内をくぐって、人としての罪を白く清める霊場としました。そして、この地にお堂を建立され、自生山岩屋寺と名づけられました。

その後、寛和二年　（九八六）　に西国三十三番札所を開かれた花山法皇がこの地に御幸なされし折　（おいでになった時）、洞窟内の観音様を拝せられ、”わが国には珍しき岩窟“霊夢のお告げにより　「これ全く観音妙智力の示現なり、朕が求むる三十三ケ所は全てこの山にあり」と申され、西国三十三ケ所第一番紀伊の那智山と、第三十三番美濃の谷汲山（たにぐみ）の各一字をとって郡谷寺と改め、七堂伽藍を御造営なされ、自ら、この地に居を構えられました。

往時は寺院二百五十ヶ坊に及ぶ隆盛を極めましたが、延元三年　（一三三八）　南北朝の争い、文明六年　（一四七四）一向一揆により坊舎が焼きつくされました。

しかし寛永年間　（一六四〇）、加賀藩主前田利常公がその荒廃を嘆き、後水尾天皇の勅命を仰ぎ、岩窟内本殿、拝殿、唐門、三重塔、護摩堂、鐘楼、書院等を再建、境内の一大庭園を復興され今日の御祈願所とされました。

こうして那谷寺は森の中の自然の曼荼羅の寺院として、今も大切に守られております。



総代の皆さんと、那谷寺から東尋坊へ足を伸ばしてきました

仏教が生んだ日本語

無 我（むが）

私たちの日常用語で「無我」といえば、無我夢中とか、無我の境地などという言い方で用いられているのが普通である。無我夢中といえば、例えば、我を忘れて夢中になって勝負事に没頭する様子などを表している。無我の境地といえば、私心なく執着を離れた無心な心の状態を表している。これらは仏教で説かれる無我という教えの本来の意味ではない。

仏教で説く「無我」とは、過去世から現在世へ、現在世から未来世への転生を可能にするためには、身体が死滅しても、消滅することなく存続する霊的実在が必要であり、それがサンスクリット語で（アートマン）と名付けられ、これを漢訳で　「我」と翻訳されたのである。仏教の出発点は、そのアートマンの実在を縁起の道理によって否定し、輪廻転生の世界から私たちを解放する解脱の道を明らかにした。従って、無我とはそのような霊的実在としてのアートマンの存在を否定する仏教の根本思想を示している重要な用語である。

空海の言葉　シリーズ

澄浄（ちょうじょう）の水には、影、万像（まんぞう）を落（うつ）す

●●●澄みきって浄らかな水面には、すべての影が映る　「十住心論」

人間は誰でも、目や耳や鼻や舌や皮膚で、自分の好きなものを、見たり、聴いたり、嗅いだり味わったり、触ったりして、興奮します。

お釈迦さまは、こんな人間の心を、「枝から枝へと、ひっきりなしに飛び移る猿のようだ」と表現されています。

たしかに人の気持ちは、目まぐるしく変わります。弘法さんは、目まぐるしく変わる人の心を湖の水にたとえて、こういわれています。

澄みきって鏡のような水面には、周りの景色も空の色も雲の形も、すべての姿がありのままに映る。

泥水が流れ込んで濁った湖の、ざわざわと騒がしく揺れ動いている水面には、木の葉一枚の姿すら映らない。

「心をじっと澄ますと、世間の動きが見えてくるんですよ」と弘法さんは教えています。